第3種郵便物認可　北海道

介護職の1割 ミャンマー人に

人手が足りない

2年連続採用で計5人

日本人の新卒応募ゼロで

【芦別】特別養護老人ホームなどを運営する社会福祉法人「芦別慈恵園」は、「特定技能」の在留資格を持つミャンマー人女性2人を介護職員として採用した。ミャンマー人の介護職員は昨春採用の3人に続いて計5人となった。同法人は高卒者などが対象の介護職員の採用が昨春、今春と2年連続で応募ゼロになるなど苦戦しているため、今後は外国人の採用をさらに増やしていくことを検討している。

芦別慈恵園

歓迎パーティーで夕食を楽しむメイ・ポウン・ミャッ・ターさん（右）とヤ・ミン・スエさん

特定技能は介護、建設、宿泊などの分野で一定の技能を持ち、日常会話程度の日本語を習得した外国人に、最長5年の在留資格を認める国の制度で、2019年4月に導入された。

同法人は毎年、空知で高校や専門学校の新卒者を対象に介護職員を募集しているが、昨年は新卒者が確保できなかった。このため、東京の外国人材紹介事業者「オノデラユーザーラン」がミャンマーで経営する介護人材育成校で学び、特定技能を取得した20代の女性3人を採用した。

3人は昨年4月から、市内の特別養護老人ホームやデイサービスセンターで、食事や入浴の介助などを行っている。3人とも働きぶりは良く、今年も新卒求人に応募がなかったため、再び外国人材を採用することにした。

今回、採用されたのはメイ・ポウン・ミャッ・ターさん(26)とヤ・ミン・スエさん(23)。2人ともミャンマーの大学を卒業し、同国内のホテルやインターネット関連会社で勤務。日本のアニメが好きで、治安がいいとの理由から日本で働きたいと考えるようになり、「オノデラ」の介護人材育成校で学んで特定技能を取得した。

2人は昨年12月、芦別に到着。既に研修を終えて働き始めている。1月12日には歓迎パーティーがあり、カレーやたこ焼きなどを味わった。芦別の印象について「雪ばかりで寒くて驚いた」と言い、今後の抱負について「日本語がうまくなりたいし、仕事を早く覚えたい」と語った。

同法人の介護職員は約60人で、これで1割近くが外国人材になった。

川辺弘美総合施設長は「昨年採用した3人はまじめで介護の基本ができているし、勤労意識も高い」と評価。今回の2人についても「職場に早くなじんでもらいたい。今後は調理員なども含めて、外国人材を増やすことも考えたい」と話している。

（宍戸透）